平重衡の人物像の形成についての一考察

――生け捕り後の重衡像――

四重田　陽美

はじめに

平重衡は、平清盛と平時子を父母に持ち、一一五七年（保元二年）に生まれた清盛の末子である。生誕の前年、一一五六年に保元の乱、二年後の一一五九年に平治の乱が起こり、天皇や貴族が、源氏や平家の武士を巻き込んで戦ったが、この二度の乱で後白河天皇に味方して勝ちをおさめた平清盛は、後白河天皇の信頼を得て、栄華を極めていく。つまり、重衡は、清盛が宮中に出入りして後白河天皇に信頼され、着実に栄華への階段を上るのを見ながら、成長していったわけである。ただ、重衡は時子の産んだ子としても三番目の男子、清盛の子としては五男であり、武門の家では、嫡男とそうでない者の立場は大きく異なるため、本来ならば重衡はさほど注目される存在ではないはずである。実際、清盛の弟たちに対する『平家物語』の扱いをとってみても、家盛は夭折したため名前は現れず、経盛（つねもり）、教盛（のりもり）、頼盛（よりもり）、忠度（ただのり）といった弟たちも、琵琶や和歌が得意だったり、子のために奔走したり、平家を裏切ったり、そういった武門の出とは程遠い所で、まるで兄清盛の栄華とは関係ないかのような、人物像の作られ方である。

しかし重衡は、『平家物語』において、巻第三「御産」で、中宮徳子が出産したとき、「中宮亮」として、

御簾の内よりつつと出て、「御産平安、皇子御誕生候ふぞ」と、たからかに申されければ

と、徳子の皇子出産を皆に伝える晴れ晴れしい役割を担ったことがしっかりと記されている上、巻第四「三井寺炎上」、巻第五「奈良炎上」で総大将として三井寺及び興福寺・般若寺といった奈良の寺を攻め、寺々を焼失させたこと、巻第九「重衡生捕」で源氏に生け

捕られ、巻第十では「内裏女房」「八嶋院宣」「請文」「戒文」「海道下」「千手前」と半分近く重衡について語られ、巻第十一「重衡のきられ」で亡くなるまで、かなりの注目ぶりである。

後述するが、平家が奈良を責めると決め、官軍として出陣した時、総大将の一人として、誤って東大寺を焼いてしまい、隠れていた女子供や老僧を何千人も焼死させたばかりか、大仏の首が焼け落ちるという事態を引き起こした重衡は、一の谷の合戦で平家が敗れた時生け捕りになり、都の中を罪人として引き回され、鎌倉へ移送されて頼朝と対面し、最期は奈良の僧兵に引き渡されて首を晒される。これだけのことを基に人物像を作れば、大悪人として書くことは容易であり、勧善懲悪の観点からも非常に描きやすいはずなのに、何故か、重衡は、『平家物語』の多くの章を使って、女性たちに愛される存在として描かれるのである。これはどういうことであろうか。

そこで本稿では、『平家物語』以外の資料からうかがえる平重盛の姿、さらに、一の谷の合戦後、生け捕りになった平重衡の人物像を、『平家物語』がどのように形成していったか、語り本系の『覚一本平家物語』（以下『覚一本』）と読み本系の『延慶本平家物語』（以下『延慶本』）を比較しながら、考察していきたいと思う。

第一章　宮中に出入りする平重衡の姿

世の中が平和だった頃の平重衡については、次のような記事からうかがえる。

一一七六年（安元二年）、後白河上皇は五十歳になった。このため、後白河上皇の住む法住寺殿では、五十の賀の祝宴が催された。その様子は、『百錬抄』『玉葉』『安元御賀記』に記されている。

まず、天皇の五十歳の祝賀の儀に、「青海波」を舞うという恒例についてだが、もとを正せば『源氏物語』の「紅葉賀」からであるという。「青海波」という舞は、面を付けないことと、二人舞であることが特徴で、これを舞う源氏の君の輝くばかりの美しい顔と、『源氏物語』では光源氏に引けを取らないとされている頭中将が、光源氏と共に舞って、やはり源氏の君が一段と美しいと評価される様子を描くことが重要なのである。その場面について、『源氏物語』から引用する。

源氏中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将。容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入り方の日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。

（『源氏物語』第七帖「紅葉賀」第一章　御前の詩楽　より）

（訳）源氏の中将は、青海波をお舞いになった。一方の舞手には左大臣家の頭中将である。頭中将殿は、容貌も心づかいも人よりは優れているが、源氏中将と立ち並んでは、やはり桜のそばの深山木のような様子である。夕日の入り方の光が、鮮やかに差し込んでいるところで、楽の声が高まり、感興もたけなわの時に、二人同じ舞で、その足拍子、表情は、世にまたとない様子である。（訳は拙訳による。以下同）

これだけを読むと、この場面は、面無し、二人舞のために、頭中将が「桜のそばの深山木」と表現され、光源氏の美しさが強調されることになるが、実は、試楽が終わったあと、源氏の父の桐壺帝は、次のように言うのである。

片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま、手づかひなむ、家の子は殊なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこけれど、ここしうなまめいたる筋を、えなむ見せぬ。

（訳）「相手役の頭中将も、悪くはなく見えた。舞の様子、手捌きは、良家の子弟は格別であるよ。世間で名声を得ている舞専門の男どもも、本当に立派だが、高貴な貴族の子ならではの、おっとりとして優美な趣きを見せることができない。

つまり、『源氏物語』において、天皇の五十歳の祝賀会では、源氏の中将のように美しい貴公子と、頭中将のような貴公子が、二人並んで「青海波」を舞う、二人の高貴な中将のあでやかさが祝賀に彩りを添え、その上で、源氏の君の美しさが強調されることになっている。

『源氏物語』が人々に読まれて以降、天皇家で、五十の賀には「青海波」という恒例ができていったようである。『安元御賀記』には、後白河上皇の「五十の御賀」の様子を、作者藤原隆房が細かく記している。「安元御賀」は、後白河上皇の曾祖父にあたる白河法皇の、「康和御賀」の例に倣って、安元二年の3月4日から6日にかけて、盛大に執り行われた。宴には後白河上皇・建春門院（平滋子）・高倉天皇・中宮（平徳子）・上西門院（統子内親王。後白河天皇の姉でありながら准母として皇后宮となる）・守覚法親王（後白河第二皇子）他、関白・大臣・公卿・平氏一門が出席し、初日は舞と楽が披露され、翌日には船を浮かべて、管弦や蹴鞠が行われたのである。最終日の後宴では、高倉天皇が笛を吹き、人々を感嘆させたことも記されている。賀宴が無事に終わると、後白河上皇は非常に喜んで、四条隆季を使者として、平清盛に、「此度の御賀に、一家の上達部、殿上人、行事につけても、殊にすぐれたる事おほし。朝家の御かざりと見ゆるぞ」と院宣を下した。清盛は返礼として、金百両を入れた銀の箱を送ったと記されている。

この、初日の「舞」は次のようなものである。

少将隆房、左の舞人に、はやうとすすむれば、しばしありて権のすけ少将維盛出でて落蹲入綾（らくそんいりあや）をまふ。青色のうえのきぬ、すほうのうへの袴にはへたる顔の色、おももち、けしき、あたり匂いみち、みる人ただならず、心にくくなつかしきさまは、かざしの桜にぞことならぬ。

（訳）藤原隆房が、左の舞人に、「はやく」と促すと、しばらく経って平維盛が出て落蹲を舞い、入綾で舞いながら舞台を降りる。青色の上の衣、蘇芳色（黒味を帯びた赤色）の上袴に映えたお顔の色、顔つき、様子で、あたりにいい香りが満ちあふれ、維盛の姿を見る人は、並み一通りではないと思い、そのすばらしく心ひかれる様子は、頭に挿した桜の美しさと同様である。

ここでの「落蹲」とは、「雅楽の舞楽で、二人舞の納曽利（なそり）を一人で舞うときの呼称」であり、「入綾」とは、「舞楽で、退場するとき、舞いながら舞台を降りる演出。また、その舞」を指す。維盛は、二人舞を一人で舞い、さらに、舞ながら舞台を降りたのである。

初日は、平維盛が一人で舞い、見る人を感動させた。そして、最終日には、平家の公達たちの多くが「青海波」を演奏し、舞うために楽屋へと向かったと記されている。

青海波出で代はりて舞ふ。これもり。なりむねなどなり。権亮少将。右の袖のかたぬぐ。…（中略）…維盛の朝臣の足ぶみ。袖ふる程。世のけいき。入り日の陰にもてはやされたる。似る物なく清らなり。おなじ舞なれど。目馴れぬさまなるを。内院を始め奉り、いみじきめでさせ給ふ。父大将こと忌みもし給はず。おしのごひ給ふ。ことわりと覚ゆ。片手は源氏の頭の中将ばかりだになければ。なかなかに人かたはらいたくなんおぼえけるとぞ。

（訳）青海波を交替しながら出て舞う。維盛、成宗などである。維盛は、右の袖を片方脱ぐ。…（中略）…維盛朝臣の足の踏み方、袖を振る様子、あたりの景色、沈む日の光に美しく照らされている。他に似る物がなく美しい。同じ舞ではあるが、見たことがない様子であるので、高倉天皇や後白河上皇を始めとして、皆たいそう素晴らしいとお思いになる。父重盛大将は、本来なら涙は不吉だからと我慢なさるはずなのに、こらえきれず、お泣きになる。それも当然だと思われる。相方は、藤原成宗などで、源氏物語の頭中将ほどでさえない。かえって人々はいたたまれなく思われたという。

つまり、「青海波」は、維盛を含む何人かで交替で舞い、中には藤原師長の養子の成宗らもいたが、人々は維盛の美しさに感心し、

父重盛は涙を堪えられなかったのである。

さて、この「青海波」については、平維盛の美しさが後々まで語りぐさとなり、『平家物語』や『建礼門院右京大夫集』などでも紹介されている。そして、隣で舞った人は、重衡ではなく藤原成宗などが舞ったのだが、人々は、断然見劣りがすると思ったようだ。

重衡はどうしていたかというと、『安元御賀記』では、琴を弾く重衡の姿や、中日の5日に、人々が蹴鞠をしている様子が描かれ、「頭中将実宗、中宮亮重衡、ことに花やかにほこりかなる若き人にて、（蹴鞠の失敗に）えたへず笑ひぬる」と書かれている。維盛のように周囲を感嘆させるほど美しくはなくても、花やかで誇らしげな若者だったということである。もし、維盛と重衡が「青海波」を二人で舞っていたら、『源氏物語』の有名な場面が現実のものとなったとして、人々の記憶にきっと残ったはずである。『安元御賀記』や他の貴族の日記に書かれていないということは、重衡は踊らなかったのである。

ところが、鎌倉時代、『平家物語』よりあとに創られた『平家公達草紙』では、維盛の相方が誰だったかは記さないながらも、このときの重衡の役職を、本来の中宮亮ではなく、頭中将と紹介している。源氏の君に生き写しのような美しい維盛と、二人舞をする「頭中将」なら重衡だという、当時の人の思い込みが生まれたのは何故か。さらに、そのまま時代が進むにつれ、維盛と「青海波」を舞ったのは、平重衡ということになっていく。後代に平重衡の名はしっかりと残されていったのである。清盛の五男でありながら、皆が注目する存在として人々に認識される重衡像は、どのようにして形成されていったのだろうか。次章では、『平家物語』に描かれる重衡像をまとめていく。

第二章　女性に愛される重衡像

さて、この素晴らしい祝宴からわずか三ヵ月あとに、平家一門が震え上がる「鹿谷事件」が起こる。藤原成親や西光法師、俊寛僧都といった平家にも身近な、後白河上皇の側近たちが、平家を滅ぼす陰謀を企てていることが発覚したのである。多田行綱の密告（返り忠）により、なんとか事なきを得るが、その後、平家は不幸続き、戦乱続きとなっていく。重盛という清盛の嫡男の病死、そして、その重盛の所領を後白河上皇が勝手に人に譲渡すると、鹿谷事件に後白河上皇が関わっていたと報告を受けていた清盛は、堪忍袋の緒が切れたように、後白河上皇を鳥羽の離宮に幽閉する。後白河上皇と平清盛の関係は決裂した。

さらに、後白河上皇の三男で不遇の皇子だった高倉宮以仁（もちひと）王が、源頼政に促され、一一八〇年（治承四年）、全国の源氏たち宛に、

「平家追討の令」を出す。この企てはすぐに露見し、源頼政一族は以仁王を逃がすために宇治平等院で官軍を迎えて戦死、以仁王は奈良へと逃げる途中で流れ矢に当たって亡くなってしまった。平家は、以仁王に味方した奈良の興福寺や般若寺の僧兵たちを、攻めることにする。このとき、奈良攻めの大将軍を任じられたのが、平重衡だった。

戦いは日暮れまで続いた。当時の戦いの常として、夜は暗中での同志討ちを嫌って、民家に火を点けその灯りで戦う。重衡も、この例にならっただけだったのだが、点けた火が、折からの強風にあおられ、東大寺を焼き、大仏を燃やしてしまうことになる。これにより、重衡は、戦いには勝ったが、大きな仏罰を背負うのである。

この後、重衡はずっと、「仏罰を背負って生きる」人となる。一一八一年、大好きだった父清盛の病死と、木曽から破竹の勢いで都に迫る義仲軍を前に、一一八三年（寿永二年）七月、平家一門は都を離れることになった。このとき重衡がどのような思いでいたかは、『平家物語』にも書かれてはいない。二位尼と言われて平家一門を陰から支えた時子にとって三番目の息子であり、中宮徳子にとって頼れる弟の重衡は、ただ、「落ち行く平家」の一人として「本三位中将重衡」と記されるのみである。

平重衡が注目されるのは、一一八四年（寿永三年）三月、一の谷の合戦に平家が源義経に負けた時、須磨あたりの海岸で、源氏に生け捕りになってしまうところからである。生け捕りになった重衡は、乱れた姿で市内を引き回される。この時、物語はその乱れた姿の重衡を見る都の人々の声を記している。

同十四日、生け捕り本三位中将重衡卿、六条を東へわたされけり。小八葉の車に前後の簾を上げ、左右の物見を開く。土肥次郎実平、木蘭地の直垂に小具足ばかりして、随兵三十余騎、車の前後にうちかこんで守護し奉る。

京中の貴賤、是を見て、「あないとほし。如何なる罪の報いぞや。いくらもまします君達の中に、かく成り給ふ事よ。入道殿にも二位殿にもおぼえの御子にてましましかば、御一家の人々も重き事に思ひ奉り給ひしぞかし。院へも内へも参り給ひし時は、老いたるも若きも所をおきて、もてなし奉り給ひしものを。是は南都をほろぼし給へる伽藍の罰にこそ」と、申しあへり。河原まで渡されて、かへつて、故中御門藤中納言家成卿の、八条堀河の御堂にする奉つて、土肥次郎守護し奉る。

（『覚一本』巻第十「内裏女房」）

（訳）同一一八四年三月十四日、捕虜の重衡卿が六条通を東へと引き回された。小八葉（八葉の紋のある網代車）の前後の簾をあげ、左右ののぞき窓を開いている。土肥の実平が木蘭地

（黒みがかった黄赤色）の直垂に小具足（籠手・脛当て・脇楯）だけつけて側につき、供の騎馬兵士三十余騎が車の前後を囲んでお守りする。

京中の身分の高い者も低い者も、これを見て、「ああお気の毒だ。どういう罪の報いなのか。多数おられるご子息の中で、重衡殿だけこのようになられる事だよ。清盛殿も時子殿もお気に入りの子でいらっしゃったので、ご一家の人々も重んじ申し上げていらっしゃったのに。後白河上皇の所へも内裏へも参りなさった時、老いた者も若い者も、一目置いて、大切に扱い申し上げなさったのに。これは奈良を焼き滅ぼしなさったお寺の罰が当たったのか」と話し合い申し上げていた。六条河原まで引き回されて、それからもどって、藤原家成仰の八条堀河にあった御堂にお入れ申し上げ、土肥実平が見張り申しあげる。

『覚一本』は、重衡のことを、清盛にも時子にも、「おぼえの御子」で「重き」存在だったと記す。そして、そんな秘蔵っ子が生け捕りになって、都中を見世物のように引き回されるのは、「伽藍の罪」のせいかと人々に語らせるのである。

都の中、土肥次郎実平の監視の下、重衡は今後の処遇が決まるのを待つ。死刑なのか、鎌倉へ護送されて頼朝と会うのか、いずれにしても希望の持てるものではない。さらに頼朝たちは、重衡の身柄を安徳天皇の持つ三種の神器と交換するよう、屋島にいる平家と連絡を取れと重衡に命じる。自分にそれほどの価値など無いことを重々承知しながら、重衡は手紙を書く。これほど悲嘆にくれる日々の中で、『平家物語』が記すのは、重衡が都で、かつて関係のあった女性と会う話なのである。

（一）　内裏女房（『覚一本』巻第十　「内裏女房」）

囚われの身の重衡の所に、かつて使えていた侍の知時（ともとき）が訪れ、実平の許しを得て一晩無聊を慰めることがあった。重衡は思いがけないことに喜びの涙を流し、知時と昔話に耽る。話がかつて交際のあった内裏で働く女房のことになり、重衡は知時に手紙を届けて欲しいと言うのである。

「西国よりとられてありし有様、今日明日とも知らぬ身の行末」など、細々と書き続け、奥（おく）には一首の歌ぞ有りける。

涙川うき名をながす身なりとも　今一度のあふせともがな

（訳）「西国から生け捕りになって来た様子や、今日明日ともしれないわが身の将来」などと、こまごまと書き続け、終りには一首の歌があった。

悲しみの涙でできた河に、つらい評判をたてて流れる悲しいこの身だが、もう一度あなたと逢う機会があればいいなあ

内裏にやってきた知時が声をかけると、女房は日ごろの慎みも忘れ、自ら端近まで出て手紙を受け取る。

女房これを見給ひて、とかうの事をも宣はず、文を懐に引き入れて、唯泣くより外の事ぞなき。稍久しう有つて、さてもあるべきならねば、御返事あり。心苦しういぶせくて、二年をおくりつる心の中を書き給ひて、

君ゆゑに我もうき名を流すとも　底のみくづとともに成りなむ

（訳）女房はこれを御覧になって、あれこれおっしゃることもせず、手紙を懐に入れて、ただ泣いてばかりいる。かなり時間が経って、いつまでもそうしているわけにもいかないので、ご返事をなさる。心がいたみ、気がふさいだ状態で、二年を過ごした心のうちをお書きになって、

たとえあなたのために私もつらい評判を流すことになっても、一緒に涙河に身を投げて死んでしまおう

女房が罪人重衡のことを思っていることを知った重衡は、牛車を遣わして、つかの間、会うことになった。和歌を交わし、短い時間ながらも会うことのできた女房は、

中将南都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えしかば、やがて様をかへ、濃き墨染にやつれ果ててかの後世菩提を弔はれけるこそあはれなれ。

（訳）のちに重衡が奈良へ連れて行かれて、斬られなさったという噂が伝わってきたので、（この女房は）すぐに出家して、濃い墨染の衣に身をやつし、重衡の来世の菩提を弔われたのはしみじみと胸をうつことであった。

このように、出家して重衡の菩提を弔いつづけたのである。

『延慶本』ではどのように記されているか。まず、重衡が内裏で働く女房と再会できたのは、『延慶本』では、屋島から重衡と三種の神器の交換が拒絶されたあとである。この時点で、もともと諦めてはいたが、重衡が生きて平家と合流できる可能性は無くなったし、いつ殺されてもおかしくない状況になっている。さらに、重衡の許を訪れた侍は「知時」ではなく、「信時」と記されている。そして手紙は、

何ならむ野山の末、海河の底までも、甲斐なき命だにあらば、申す事もありなむとこそ思ひしに、それも叶はず。生きながら取られて、恥をさらす事の心憂さ、この世一つの事にはあらじ。先世の宿業にてこそあるらめと思へば、人をも恨むべからず。この世にあらむ事も今日と明日とばかりなり。いかにしてか今一度相見奉らむ」とあはれなる事どもつきせず書き給ひて

涙河　憂き名を流す身なれども　今ひとしほの逢う瀬とも

がな

『覚一本』よりも詳しい文である上に、「なんとかしてもう一度逢えないか」とはっきりと書いている。さらに、女房もまた「逢いたい」と返し、二人はつかの間の逢瀬を得る。重衡と別れたあと、女房は、

その後は内裏へは参り給はず、里にぞ住み給ひける。せめての事とおぼえて、推量られてあはれなり。

女房は実家へ戻り、その後どのような生涯を送ったかはわからない。『覚一本』では自分の処遇が決まらないうち、『延慶本』では交渉が決裂して死ぬしかない絶望の最中というさらに追い詰められた時に、かつての恋人との逢瀬を楽しむ時間と心の余裕が、重衡にはあったのである。

（二）千手前

鎌倉に送られ、頼朝と堂々と対面し、その後汚れた衣裳を着替えて入浴した重衡の、世話係は千手前という女性だった。監視役の狩野介宗茂がもてなすために呼び出したのは、「齢はたちばかりなる女房」で、重衡を湯浴みさせ、晩酌の相手をし、関東には珍しく、漢詩を吟じ、琴を弾き、白拍子を口ずさめる教養のある女性だったが、この千手前も重衡を世話する短い時間で、重衡に惹かれていく。

（親義が）「平家は本より代々の歌人才人達で候ふなり。先年此人々を花に譬へ候ひしに、此三位中将殿をば、牡丹の花に譬へて候ひしぞかし」と申されければ、（頼朝が）「誠に優なる人にてありけり」とて、琵琶の撥音、朗詠のやう、後までもありがたき事にぞ宣ひける。千手前はなかなかにもの思ひの種とや成りにけん。されば、「中将南都へ渡されて斬られ給ひぬ」と聞えしかば、やがて様をかへ、濃き墨染にやつれ果て、信濃国善光寺に行ひすまして、彼の後世菩提を弔ひ、我身も往生の素懐を遂げけるとぞ聞えし。

（『覚一本』巻第十　「千手前」）

（訳）親義が、「平家の人々はもともと先祖代々、歌人・才人たちだそうです。先年この人々を花にたとえました時、この重衡を牡丹の花にたとえたそうですよ」と申しあげなさったところ、頼朝は、「全く優雅な人であったなあ」といって、琵琶の撥音や朗詠の様子を、後々までもめったにない事のようにおっしゃった。千手前は、かえって物思いの種となってしまったのであろうか。それゆえ、「重衡が奈良へ連れて行かれて、お斬られになった」という事が伝わると、すぐ姿を変えて尼になり、濃い墨染の衣に身を包み、最後まで目立たない有様になりきって、信濃国善光寺で一心に修行し、重衡の来世の冥福を弔い、自分もついにかねて望んだ極楽往生をしたという事だった。

『延慶本』においては、千手前は頼朝に四、五年ほど仕えている十六歳くらいの女性として登場し、重衡をもてなすように言ったのは頼朝であると書かれている。さらに、千手前は重衡が亡くなったあとどうしたかということは書かれず、ただ、重衡が琵琶の名手であったことが丁寧に記されている。

（三）　大納言佐（重衡の北の方）

頼朝は、重衡を奈良の僧兵に生きて渡すことに決め、重衡は東海道を上り、都へは入らず、大津から山科、醍醐を経て、日野（現在の京都市伏見区）を通りすぎる。ここには、重衡の妻、大納言の佐が壇の浦で捕らえられたあと、ひっそりと暮らしていた。重衡は、日野に近づいたときに、「われは一人の子なければ、この世に思ひ置くことなきに」と断って、「年ごろ相具したりし女房の、日野といふところにありときく」と言い、逢わせて欲しいと願い出る。

北の方御簾のきは近く寄つて、「いかに、夢かや現か。これへ入らせ給へ」とのたまひける御声を聞き給ふに、いつしか先立つ物は涙なり。大納言佐殿、目もくれ心も消え果てて、しばしは物ものたまはず。三位中将、御簾うちかづいて、泣く泣く宣ひけるは、「去年の春、一の谷でいかにも成るべかりし身の、せめての罪の報いにや、生きながら捕らはれて、大路を渡され、京鎌倉に恥をさらすだに口惜しきに、果ては奈良の大衆の手へ渡されて、斬らるべしとて罷り候ふ。いかにもして、今一度御姿を見奉らばやと思ひつるに、今は露ばかりも思ひ置く事なし。出家して、形見に髪をも奉らばやと思へども、許されなければ力及ばず」とて、額の髪を少し引きわけて、口の及ぶ所をくひ切つて、「これを形見に御覽ぜよ」とて、奉り給ふ。北の方は、日ごろ覚束なくおぼしけるより、今一入悲しみの色をぞ増し給ふ。

（『覚一本』巻第十一　重衡被斬）

（訳）奥方は御簾のきわ近くに寄って、「これはまあ、夢なのか現実なのか。こちらへおはいりなさってください」とおっしゃったお声を重衡がお聞きになるにつけ、早くも先立つものは涙である。大納言佐殿は、目もくらみ正気もすっかりなくなって、しばらくは何もおっしゃらない。重衡は御簾の中に顔をさし入れて、泣く泣くおっしゃったことは、「昨年の春、一の谷で死ぬはずだったこの身だが、あまりにも重い罪の報いなのだろうか、生きたまま捕えられて、大通りを引き回され、京都・鎌倉で恥をさらすのさえ残念に思うのに、最後は奈良の僧侶の手に渡されて、斬られるのがよいということで奈良に参ります。なんとかして、もう一度あなたのお姿を拝見したいと思っていたので、こうして会えた今は、ほんの少しも思い残す事はない。

出家して、形見としてあなたに私の髪でも差し上げたいと思うけれども、出家も許されないのでどうしようもない」とおっしゃって、額の髪を少し引き分けて、口の届く所を噛み切って、「これを形見に御覧になってください」といって、差し上げなさる。奥方は、数日前から夫のことを気がかりにおもっていらっしゃった時より、よりいっそう悲しみの色が深くなられる。

重衡の汚れた衣裳を見かねて、大納言の佐は新しい着物を取り出し、喜んで着替えた重衡は、汚れた衣裳もまた形見にと置いて、来世で再会する約束をして去る。

「契あらば、後世にては必ず生れあひ奉らん。『一つ蓮に』といのり給へ。日もたけぬ。奈良へも遠う候ふ。武士の待つも心なし」とて出で給へば、北の方袖にすがつて、「いかにやいかに、しばし」とて引き留め給ふ　（同右）

（訳）「前世からの宿縁があったら、来世ではきっと生まれ会い申し上げよう。『極楽の池の同じ蓮の葉の上に生まれるように』とお祈りなさってください。日も高くなった。奈良へも遠うございます。武士どもが待っているのに長い間待たせるのも思いやりがないことだ」といって重衡が出て行かれるので、奥方は重衡の袖にすがって、「どうして、どうして、もうしばらく」といってお引きとめなさる。

額髪を食いちぎり、着替えた衣裳まで、「形見に」と置く重衡は、自分が仏罰を背負っていることなど重々承知で、まるで祈れば叶うかのように、「来世で同じ蓮の上に」と祈ってくれと言い残してきっぱりと去る。同じ場面を、『延慶本』では、巻第六本で、まず「廿八　重衡卿北の方の事」で重衡の妻の紹介をし、「三五　重衡卿日野の北の方の許に行く事」で詳しく紹介する。日野の北の方の許を訪れた重衡だが、「出家したら、髪を形見に渡せたのに、出家も許されないから、形見を渡せない」と泣き崩れ、北の方の出した着物（練り貫の小袖）に着替えるのをみて、北の方はこれが「最後の形見」になるのだと考えて泣く。

こうして、三人の女性に最後まで愛された重衡であるが、『平家物語』では、どのように描かれているのか、考察を加えたい。まず、（一）の内裏女房であるが、内裏で働くような身分のある貴族の女性が、戦場で血を浴びて穢れたばかりでなく、多くの罪も無い人や大仏を焼いてしまった重衡に、未だに愛情を持っている姿を描くことで、重衡が真の悪人ではなく、運と仏に見放された気の毒な貴人と印象づけている。内裏の女房が、重衡の遣わした牛車に乗ってやって来たとき、重衡は、

縁に車をやり寄せて、かくと申せば、中将車寄に出で迎ひ給ひ、「武士どもの見奉るに、下りさせ給ふべからず」とて、

車の簾をうちかつぎ、手に手を取り組み、顔に顔を推し当てて、暫しはものも宣はず、唯泣くより外の事ぞなき。

（『覚一本』巻第十　「内裏女房」）

（訳）濡れ縁に車を寄せて、女房がお着きですと申しあげると、重衡殿は車寄せに出迎えなさり、「武士どもがあなたを拝見するので、車をお降りになってはいけない」といって、車の簾をくぐって内にはいり、手に手をにぎり、顔と顔を当てて、しばらくはなんともおっしゃらず、ただ泣くだけであった。

高貴な女性が武士達の目にさらされることを慮って、女房に、車から降りることを制止し、牛車から下がる御簾に頭を突っ込んで、衆人の目から守る重衡の優しさは、当の女房だけでなく、この話を聴いたり読んだりする者たちの心に響く。

（二）の千手前のエピソードについては、『延慶本』によりその傾向が強く出ていると思われる、重衡の琵琶演奏の素晴らしさである。大仏を焼き払う恐ろしい武将だと思っていた重衡が、琵琶を奏でて人の心を打つ、高貴で優雅な人であったという意外性は、千手前の姿に現れている。『覚一本』では、千手前が亡くなった重衡を思って出家したと描かれているが、むしろ、それを描かなくても、鎌倉で一番の教養を誇る頼朝に五年も仕えた千手前が感心する姿で、十分、鎌倉の人々の驚きが伝わる形となっている。

（三）の大納言佐については、『覚一本』では、自ら額の髪を食いちぎったり、着替えた衣裳を「形見にしてくれ」という重衡の姿は、自らの命に執着のない、ただ相手のことだけを想っている様子がうかがえる。『延慶本』はむしろ、生に執着せず、髪や衣裳のような形見を妻に遺す事に対してさえ執着を持たない、ただ、ひたすら、妻との最後の時間を大切にする重衡が描かれていく。

『平家物語』においては、生け捕りのあと、処刑されるまでの重衡と関わる女性たちの逸話は、重衡が女性にもてた話なのではなく、大仏を焼く大悪人のはずが、女性たちに細やかな気遣いのできる貴人であることを強調するために語られているのである。

おわりに

一の谷の合戦で生け捕りになった平重衡が、不幸を背中に漂わせながら、女性たちに愛される姿をまとめた。建礼門院徳子に仕えた女房の記す『建礼門院右京大夫集』には、平和な時代の重衡の姿が描かれている。

宮の亮の、「内の御方の番に候ひける」とて入り来て、例の、あだごともまことしきことも、さまざまをかしきやうに言ひて、我も人もなのめならず笑ひつつ、はてはおそろしき物語などもをしておどされしかば、まめやかにみな汗になりつつ、「今は

聞かじ、のちに」といひしかど、なほなほ言はれしかば、はては衣を引きかづきて、「聞かじ」とて、寝てのちに心に思ふこと、

あだごとに　ただいふ人の　ものがたり　それだに心　惑ひぬるかな

（訳）重衡さまが、「天皇さまのお側に宿直の番でお控え申し上げていた」といって、私たちの部屋に入ってきて、いつものように、冗談も真面目な話も、あれこれ面白いことを言って、ご自身も他の人たちも笑いすぎるくらい笑って、最後に怖い話などもして、私たちを脅しなさったので、本気で皆冷や汗をかきながら、「もう聞きません、またあとで」と言ったのに、やっぱり重衡さまはおっしゃったので、最後は衣を頭からかぶって、「聞きません」と言って、寝たあとで心に思った和歌は、

冗談で、ただ話しているあの方の話なのに、聞いただけで、怖くて心が乱れてしまうなあ。

このエピソードに見られる重衡は仕事のついでに女房たちの部屋へさっさとやってきて、怪談話で女房達を怖がらせて喜んでいる。この時の彼は、平家が滅びるとも、自分が仏罰を背負い、奈良の東大寺の門の前にさらし首になってしまうことも、想像だにしない、陽気でやんちゃで誰からも愛される人物である。

『平家物語』においては、二人の登場人物を対比する方法でそれぞれの存在を象徴的に現すことが多いことは、拙稿においても何度も指摘してきた。重衡はその視点で見れば、甥の維盛と対比されて表現されている。誰が見てもはっとするほど美しい維盛よりも、たくさんの女性にもてた平重衡。それは、『平家物語』が流行した後代においてもずっと、変わらない。『平家物語』の創り上げた平重衡像は、寺院や大仏や無辜（むこ）の人々を焼いた極悪人ではなく、女性たちのことを大切に思い、愛した女性たちから命がけで愛される優しい人物である。そしてそれは同時代に生きた人々の証言に見える、清盛の息子という高い地位・立場を自らきさくに破って、女性たちに気楽に声をかける姿と重なっている。『平家物語』の語り手と呼べる存在が重衡をこのように描くことを意図したとすれば、存命中のみならず永く重衡が女性の人気の的となっていくのもうなずけることであろう。

参考文献一覧

- 稿中引用した『源氏物語』は、「源氏物語（2）」（日本古典文学全集　小学館　1973年）を用いた。
- 稿中引用した「安元御賀記」は、塙保己一編『群書類従　第29輯』（群書類従刊行会　1955年）を用いた。
- 稿中引用した「覚一本平家物語」は、『平家物語　上』『平家物語　下』

（日本古典文学大系　32・33　岩波書店　1983年）を用いた。

- 稿中引用した「延慶本平家物語」は、北畑保雄・小川栄一編『延慶本平家物語　本文篇　上・下』（勉誠社　平成二年）を用いた。
- 久保田淳著「平家文化の中の『源氏物語』―『安元御賀記』と『高倉院昇霞記』―」（「文学」50巻7合　昭和57年7月）
- 壬生由美著「『平家物語』における平維盛像の形成―『源氏物語』との関係をめぐって―」（「国文」73合　平成2年7月）

〔追記〕　廣田収先生、同志社大学でのご研究、さらに多くの学生をお育てくださいまして、本当にありがとうございました。私の一番大切な思い出は、4回生の教育実習の際に、実習先の研究授業にわざわざ足をお運びくださって、参観後に暖かくご指導くださったことです。私も今教壇に立ち、後進の指導に携わる毎日で、学生さん達の能力と熱意を尊重しながら育てていくことに心を砕くよう心掛けているのは、あの日の事があったからだと思っております。どうぞ健康にご留意くださって、第二の人生も愉しんでくださいますよう、お祈りいたしております。